五代教主作 灰釉茶盌 銘「雲海」

平成23年(2011)

阿づまの光

8月号・Aŭgusto

題字 出口直日

通巻　第５０９号
発行　大本東京本部
東京本部長　松田行彦
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL(IP) 050-5510-9502
03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
E-mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

この夏の節電に思う

東京本部次長　森　良秀

この夏のキーワードは「節電」。政府は、この夏の電力危機を避けるため、七月一日から法律に基づいて「電力使用制限令」を東京電力と東北電力の管内で発動した。制限令発動は、第一次オイルショックの昭和四十九年以来、三十七年振りだそうである。

大口需要家の自動車工場や百貨店などの商業施設、オフィスビルなどは、最大電力を昨年の夏より十五％削減が強制され、違反すると罰金が科せられる。一方、小口需要家と家庭に対しては、努力目標として同じく十五％削減が求められている。

これを受けて東京本部は、職員が知恵を出し合い「照明」「冷房」「トイレ」「エレベーター」「服装」等についての節電計画を立ち上げ、七月一日より実施した。一番電気を消費すると言われるエアコンは、ご神前の間をはじめ各室内の温度を二十八度に設定、また事務所、廊下、洗面所などの間引き照明に取り組んだ。四年前に新しく建て替わった新東京本部は、全館冷暖房の機能を有していると共に、旧建物に比べて延べ床面積が倍増し、この度の措置でかなりの電気使用量の削減率が期待できると思われる。

電力需要の抑制は、これより以前、すなわち東日本大震災で福島第一原子力発電所の事故により、供給量が大きく不足するため、計画停電が三月十四日から初めて実施された。計画停電の影響で、東京駅や上野駅など都内のターミナルのコンコースなどは照明が間引かれ、うす暗くなって驚いた。しかし、不思議なもので一週間も経つと目が慣れてきて、この程度の照度で十分であることを教えられた。

三代教主さまは『みろくの世というものは、今日日本人が享受している際限もなく豊かな物質本位の生活から比べましたら、かなりきびしいもの』だと示され、且つ暮らしの心構えを『すこしひもじく、すこし貧しく』とやさしく教えられた。この度の節電は、みろくの世の住人となるための極めて大事な予行練習ではないだろうか。後年、これがまさに二十一世紀のターニングポイント(転換点)だったと、振り返る時が来ると思われる。『どんな場合でも、ありがたいと思う心。これは神に近づく第一歩（尊師さま)』神さまの仁恵に浴していることを感ぜずにはおれない。

今月の聖言

何事も神の御計り給ふわざぞ
勇みよろこべ憂きもつらきも

出口王仁三郎聖師

第100回「21世紀、生きがい講座」より

大本はなぜ生まれたのか

講師 斉藤（さいとう） 泰（ひろし）
（教学研鑽室長）

〝新宗教〟の代表として

日本では今日、「宗教」に偏見を持っている人が少なくありません。その原因として、日本のマスコミは宗教の持つ良い面には目を向けず、社会問題を起こす一部の極端な例ばかりを報じていることがありますが、それ以上に、戦後教育を受けた日本人がこれまで「宗教」について学ぶ機会がなかったことも大きな問題だと思います。

ただ最近になって、宗教の必要性を思う冷静な心ある人たちの間では、今こそ教育現場で宗教を教えるべきだという声があって、本年新たに、宗教文化を教える人を育成するために〝宗教文化士〟という資格の認定制度が日本の複数の大学で実施されることになりました。

私は仕事柄、大学の先生方と接する機会が多く、その関係で今春その〝宗教文化士〟認定科目を設けたキリスト教系の私学（関西学院大学）で授業を受け持つことになりました。その内容は「世界の諸宗教」（全十四回）中の三回、テーマは「大本」。

大本以外の宗教は何かと担当教授に聞くと、ユダヤ教とイスラム、浄土真宗本願寺派（西本願寺）の三つとのこと。ユダヤ教とイスラムは、キリスト教とともに世界三大一神教。三教の信徒をすべて合わせると約三十四億人、世界総人口の二分の一を占めるといわれています。

また西本願寺は日本最大の仏教教団の一つで〝伝統宗教〟の代表、そして大本は〝新宗教〟（幕末以降から現代までに生まれた教団）の代表として選ばれたようでした。

〝新宗教〟にはおびただしい数があり、有名な大教団も少なくありません。にもかかわらず、なぜ大本が選ばれたのか。それは、日本近代史上、最大の弾圧を受けた教団として知られているのみならず、日本〝新宗教〟教団の〝生みの親〟としても有名だからです。事実、定評のある宗教専門書は大本についての記述に多くのページを割いています。つまり大本は、規模こそ大きくありませんが、知名度と影響力を持つ教団として知られているのです。

大本ならではの特徴

私が担当する授業はわずか三回。大本の場合、教義、歴史、活動が深く広いためとてもすべては紹介できません。そこで百聞は一見にしかず。授業の三回目は両聖地へのフィールドワークを計画しました。大本の二つの聖地、綾部「梅松苑」と亀岡「天恩郷」の雰囲気を肌で感じてもらう方が、文献上の知識をどれだけ伝えるよりもはるかに〝説得力〟があるでしょう。

天上界の「最奥天国」と「最奥霊国」の二つの境域をこの地上に写す聖地。厳かな神気漂う神苑には、長生殿など、息をのむほど美しい日本伝統建築群が、豊かな自然に調和して立ち並んでいます。余計な説明はいらないほど、大本ならではの特徴です。

ご祭神の「大本皇大御神（おほもとすめおほみかみ）」は〝大本教団の神〟という意味でなく、「大天主太神」とも表記し、全大宇宙の万有を創造し、生育し、今も不断にご守護くださっている大神さまです。大宇宙は一つですから「一つの神」です。ところが、神苑案内で一般の人からよくある質問は、「神さまは一つなのに、なぜ神殿のお宮は三社なのですか」というもの。事実、長生殿や万祥殿など、大本の主要な神殿には三社のお宮があります。

この三社の説明には、やや大きくいうと、〝大宇宙の始まり〟までさかのぼらねばなりません。大宇宙創造の原初において、大神さまは〝絶対一元〟の静的状態から動的な状態に移行されるときに、必然的に＋（プラス・陽極）と－（マイナス・陰極）に相応する二極の働きとなってお現れになりました。この二極の働きは〝陽・陰〟〝霊・体〟〝火・水〟〝厳・瑞〟などと表現されますが、大本では神格化してそれぞれ「厳（いつ）の御霊の大神」「瑞（みづ）の御霊の大神」とお呼びしています。

このような独特の神観から、大本神殿の三社のお宮には中央に「大本皇大御神」を、その左右に「厳の御霊の大神」「瑞の御霊の大神」をお祭りしているのです。（ちなみに「厳の御霊の大神」「瑞の御霊の大神」は総称で、幽から顕への段階ごとに、厳系の神、瑞系の神、それぞれに多くのご神名がある）

なお〝厳〟には「きびしく、おごそかな」などの意味が、〝瑞〟には「みずみずしく、うるわしい」などの意味があり、「厳の御霊の大神」を厳しい父神とすれば、「瑞の御霊の大神」は優しい母神にたとえられます。

〝錦のみ機〟のご神業

この厳と瑞、二霊の大神さまが、大本の特徴でもある「二人の教祖」のご因縁と関係してきます。

出口なお開祖さまは「厳の御霊の大神」の地上における神柱として、三千世界の「立替え立直し」を予言、警告され、「みろくの世」の実現のために〝大難を小難に小難を無難に〟とお祈りとお筆先のご用に生涯を捧げられました。もう一方の出口王仁三郎聖師さまは「瑞の御霊の大神」の地上における神柱として、贖（あがな）いと〝救済〟のお働きを担われました。

またこのお二方を通して、人為によらない〝神直々のお言葉〟として、大本の二大教典『大本神論』と『霊界物語』が生まれました。父神の教えと母神の教え、この両者の教えをあわせ持つことも大本の大きな特徴です。

ところで、大神さまのご神業・ご経綸は、

大本では〝機織り〟にたとえられます。厳と瑞二方面のお働きは、経糸と緯糸の関係にあります。その目に見えない経糸と緯糸が巧妙に織りなされて―織りあがってしまうまで人間にはその模様がわかりませんが―、最終的には「みろくの世」という美しい〝錦のみ機〟が出来上がります。

この「みろくの世」とは、水晶のように濁りのない清らかな、うそ偽りのない世界、良いことをすれば良いことが、悪いことをすれば悪いことが出てくる世界、飢えも病も争いもない、平和で穏やかな世界をさします。

〝厳・瑞〟の道統をご継承

さて、宗教学会などに出かけると、必ずといっていいほど「大本」に関する研究発表があり、大本のことを丹念に研究している人が少なくないことに驚かされます。しかし、それらの発表を聞きながらわかったことは、ほとんどの学者がまだ気づいていないことがあるということです。それは大本の「教主」さまについてです。大本歴代の教主さまは開祖さま、聖師さまの〝厳〟〝瑞〟二霊の道統を継承された方であり、大神さまのご神意を受けられ、救世のご神業をまさに進めておられる、言葉を換えれば〝錦のみ機を織られている〟方なのです。

開祖さま、聖師さまのあと、出口すみこ二代教主さま、出口直日三代教主さま、出口聖子四代教主さま、そして現在の出口紅五代教主さまと、代々お立ちくださってきた教主さま方が、その時代時代に必要なご方針をお示しになり、「大本」（教団、信徒、またその諸活動）を通して、大神さまのご経綸が進められてきました。

ここでもう一つ申し上げたいことは、大本に集う人たちにも、他宗にはない大きな特徴があることです。『大本神諭』によりますと、大本には、太古からのご因縁を持つ人たちが、いまこの時代に生を享けて誕生し、大本のご神業に奉仕されているということが示されています。

かつて昭和九年、聖師さまが発会された昭和神聖会（しんせいかい）という組織には賛同者が九百万人もいたといわれています。当時の日本人口は約六千万人ですから、実に十人に一人以上が賛同者でした。当時の国家当局が大本を恐れたのも無理からぬところがあったのかもしれません。

しかし驚くべきことは、当時の活動の中心となっていた大本の信徒数はわずかに十万人程度だったということです。この信徒数は現在とほとんど変わりません。当時その十万人が聖師さまの号令一下〝火の玉〟のように動いていたわけです。

そして昭和十年の第二次大本事件が勃発。大本の両聖地、地方の神殿もすべて破壊され、全国で三千人余りの信徒が検挙されました。中には拷問のために亡くなった方もおられました。「国賊」と罵られ、親族から絶縁され、信徒であるがゆえに職を失ったり、学校に通う大本の子どもたちは石を投げられるといった、壮絶な十年間でした。しかし昭和二十年、大本事件が無罪となって解決すると、大半の信徒が再び大本に帰ってきたのです。これほどの弾圧を受けたにもかかわらず、ほとんどの信徒が改宗しなかったことは世界の宗教史上珍しいことだそうです。

大本はそのような教団ですから、おのずと「歴史」も違ってきます。さまざまな活動、例えば生命倫理や宗際化、世界連邦、食・農・環境、芸術文化、エスペラントなど、「みろくの世」実現のために必要とされる諸活動を、歴代の教主さまのご指導のもと、先人たちは世に先駆けて「ご神業」として奉仕してきたのです。

「型の大本」として

「型の大本」という言葉もあります。この意味は、世界や日本のことが大本に鏡のように写り、それがまた型となって大本から日本へ、世界へと写し出されていくという教えです。この教えは開祖さまのお筆先にもあり、事実、大本が世界の型となったことを証しする歴史もあります。ですから、大本の中にいる一人ひとりは、世界の型をしていることになります。また良い型を出すことによって、世界中の人たちが救われるのだとも示されています。

また大本には歴代教主・教主補さま方による尊いみ教えが非常に多くあります。しかし知っていても実行できなくては、宝のもちぐされで、あまり意味がありません。それらのみ教えを生活の中に実践することで、「みろくの世」の住人にならせていただけるのだと教えられています。大本で「言心行の一致」が説かれるゆえんもここにあります。一人ひとりが「改心」し、救われてこそ、「型の大本」として万人の救われる道が開かれます。このようなことを説く教団は、世界広しといえども大本以外にはないでしょう。

以上、大本ならではの特徴の幾つかをご紹介しながら、本日の講題「大本はなぜ生まれたのか」をお話ししたつもりですが、最後に、明治二十五年旧正月、大本が開教した折、大神さまが開祖さまを通して発せられた「初発の神諭」をご紹介します。

『三ぜん世界一度に開く梅の花、艮の金神の世に成りたぞよ。梅で開いて松で治める、神国の世になりたぞよ。この世は神が構はな行けぬ世であるぞよ。今日（いま）は獣類（けもの）の世、強いもの勝ちの、悪魔ばかりの世であるぞよ。……これでは、世は立ちては行かんから、神が表に現はれて、三千世界の天之岩戸開きを致すぞよ。……三千世界の大洗濯、大掃除を致して、天下泰平に世を治めて、万古末代つづく神国の世に致すぞよ。神の申した事は、一分一厘違はんぞよ。毛筋の横巾ほども間違ひは無いぞよ。これが違うたら、神は此の世に居らんぞよ』

この現界はもとより霊界をも含めたすべての世界から、われよし、強いもの勝ちの悪い想念を大洗濯・大掃除、一掃して、永久に変わらない神国の世、「みろくの世」にすることこそ大本が生まれた理由であり、私たちがいまこうして大本に集っている理由でもあります。このことは大本が開教した明治二十五年から百二十年たった今日も全く変わってはいません。

大本基本講座

本年度の大道場「大本基本講座」が、五月二十八・二十九日（前半）と六月二十五・二十六日（後半）の二ヵ月に渡って開催され、のべ三十四人（一般一人）が参加。その内十六人が四日間の講座を修了した。

参加者は、「大本の出現」から「現代の大本」まで、普段天恩郷で聴講する九講座を受講したほか、二グループに分かれての「歓ぎの座」を行い、親睦を深めた。

東京本部で大道場修行！

講師は、猪子恒管理局次長（前半）、髙木日出喜教務局芸術部長（後半）、森良秀東京本部次長、和田桂一東京本部祭務部長、成尾義東京本部宣伝部長、田村信行東京本部総務部主任が務めた。

東光苑月次祭

東光苑月次祭は七月十日、午前十時三十分から、斎主・和田桂一東京本部祭務部長のもと執行され、三百五十人が参拝した。

祭員は埼玉主会、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は旗手彬人神奈川主会長、添釜は村井社中の皆さんが担当した。

祭典後、松田行彦東京本部長があいさつに立ち、教主さまのご動静についてや東日本大震災の見舞い活動、沓島・冠島開き遥拝祭などについて紹介。「大変な世情ではあるが、お互い手を取り思いあって共々にご神業成就を目指していくことを、今一度腹におさめていただきたい」と強調された。

祭りの作法と精神を学ぼう
東光苑秋季祭式講習会

日　程　９月２４日午前９時受付、９時半開講式
～２５日 午後４時ごろまで

会　場　東光苑　大本東京本部

参加費　１人１，０００円
※ 食事・宿泊代は別途実費を徴収

内　容　初級クラス 基本動作から月次祭まで
中級クラス 招魂式・発葬式まで
特別クラス 葬祭斎主実習
※ 特別クラスは級の認定がございません

持参品　笏、大本祭式の本、帯または紐（懐笏時に必要）、筆記用具、動きやすい服装、足袋（あれば履く方が動作が容易）、宿泊用品（宿泊の方）
※ 笏は稽古用を貸与可能

申込み　受講クラス・食事・宿泊を明記の上、大本東京本部祭務部「秋季祭式講習会」宛にお申込み下さい

定　員　４０人

締　切　９月１７日(土)
※ ただし、定員になり次第締め切りとなります

東光苑 秋をめでる夕べ

上野の杜の奥座敷・東光苑で、行灯のあかりのもと一服の薄茶をいただきながら、仲秋の名月をお楽しみください

日 時　９月１２日（月）
午後６時～８時

会 場　大本東京本部

内 容　薄茶接待・御神酒接待・お作品展示

直会後、応接室にて大本総代推薦会議や直心会東京連合会によるバザーが行われた。

第101回「21世紀、生きがい講座」

第一〇一回『二十一世紀、生きがい講座』は七月二十日午後七時から九時まで、東京本部講座室において、講師に尾﨑泰良大道場講師を迎え「人はなぜ生まれたのか①―霊界の実在」と題して開催された。参加者は十五人（内、一般一人）。

講座では、霊の存在と働き、霊界の構成や中有界の様子、霊界と現界の関係などについて、自身の体験を交えて解説。「私たちは肉体を得てこの現界に生まれ、いろんな経験を積みながら魂を向上させ、再び霊界に復らなければならない」と説いた。

霊界の存在を信じて生活を踏み行うこと

参加者からは「多少の予備知識はありましたが、更に理解を深めることができました（五十一歳・一般・男性）」などの声が聞かれた。

東光苑祭典・行事予定

8月

神集祭遥拝（初日・旧7月6日）
5日（金）夕拝時

瑞生大祭遥拝祭
7日（日）午前10時半

神集祭遥拝（最終日・旧7月12日）
11日（木）夕拝時

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭
14日（日）午前10時半

第102回「21世紀、生きがい講座」
講題 人はなぜ生まれたのか②
―心豊かに暮らす四つの秘訣
講師 西永篤史（大本120年史編纂室次長）
17日（水）午後7時～9時

9月

東光苑月次祭（長寿感謝祭）
秋季合同慰霊祭
11日（日）午前10時半

秋をめでる夕べ（旧8月15日）
12日（月）午後6時～8時

第103回「21世紀、生きがい講座」
講題 人はなぜ生まれたのか③
―ほんとうの修行
講師 宮城 聡（総局公室次長）
21日（水）午後7時～9時

三代教主毎年祭（21年）
23日（金）午前10時半

東光苑秋季祭式講習会
24日（土）25日（日）